

哲学とスケプティチスムス ——ヘーゲルの echter Skeptizismus ——

鼓 澄 治

目次

はじめに

I 基礎的考察

(i) シュルツェ哲学の批判

(ii) 古代スケプティチスムスの高貴な本質

(iii) プラトン『パルメニデス』篇における真正のスケプティチスムス

II 結論——ヘーゲルにおける真正のスケプティチスムス——

はじめに

ヘーゲル哲学に関してしばしば問題にされる事柄としてその弁証法(ディアレクティク)がある。その場合議論的になるのは、ヘーゲルの否定性の概念である。この否定性の概念をヘーゲルが着想し仕上げていく過程を顧慮しつつ考察しようとするとき問題になるのは、ギリシア悲劇、カントのアンチノミー、神の死、絶対的な無などに関するヘーゲルの考察であるが、忘れられてはならないものとしてスケプティチスムスに関する考察がある。小論は、ヘーゲル弁証法における否定性のモメントをスケプティチスムスに関するヘーゲルの考察を検討することによって可能なかぎり明らかにしようとするものである。

ヘーゲルは多くの著作の中でスケプティチスムスを取りあげている。しかし小論は、それらをすべて取りあげて検討しようとするものではなく、ヘーゲルが主題的に(テマティッシュ)、哲学とスケプティチスムスの関係について考察している論文に歩みをとどめそこに滞留してその論文の仕上げられた思索空間を開示しながら、哲学とスケプティチスムスについて考察してみたい。小論のテキストは、いわゆる『スケプティチスムス』の論文(1802)^①である。

さて、ヘーゲルがこの論文を仕上げるに至った直接的なきっかけは、シュルツェ(G. E. Schulze, 1761–1833)の著書『理論哲学の批判』(Kritik der theoretischen Philosophie, 1801. 以下Kritikと略記する)の出版である。ヘーゲルによれば、シュルツェは既に8年前にラインホルト(K. L. Reinhold, 1758–1823)を批判した書物(Aenesidemus, 1792)によって世間の注目をあび、さらに『理論哲学の批判』の中でスケプティチスムスの立場に立って理論哲学一般を殲滅し、それによってスケプティカーのリーダーとして尊敬されその第一人者の地位を獲得したという。

ヘーゲルは冒頭、シュルツェのスケプティチスムスを呈示し評価するためには哲学とスケプティチスムスの関係を明らかにすることが必要であると述べ、さらに次のように記している。「哲学に対するスケプティチスムスの関係の究明とそこから出てくるスケプティチスムス自身に関する認識は

また無用とは思われない。なぜなら、それについて通常見られる概念は極めて形式的であり、それが真実のものであるならばもっている高貴な本質は常に最近の似而非哲学の一般的隠れ家や逃げ口上に転倒されている」(S. 197. 傍点は引用者)。また、ローゼンクランツによれば、ヘーゲルは既にフランクフルト時代にプラトンやセクトゥス・エンピリクスをおおいに研究していたという (Vgl. K. Rosenkranz, Hegels Leben. 1844. 1972. S 100)。ヘーゲルは、この『スケプティチスムス』の論文において、以前から熟慮をかさねてきたプラトンも含めた古代のスケプティチスムスについての見解を「その高貴な本質」(sein edles Wesen)に焦点をあてながら披瀝している。

小論の関心は、古代のスケプティチスムス、特にプラトン哲学におけるスケプティチスムスをヘーゲルがどのように解釈しているか、そして、哲学にとってスケプティチスムスとは何であるか、という問題に向けられている。したがって、以下の考察は次のように分節される。Ⅰ、まず、(i)導入としてシュルツェのスケプティチスムスの立場とその古代スケプティチスムスに対する曲解とを簡単に検討したうえで、(ii)ヘーゲルが古代スケプティチスムスの高貴な本質をどこに見い出しているかを明らかにする。次に、(iii)ヘーゲルが、自らの真正のスケプティチスムスの典型を看取しているプラトンの『パルメニデス』篇をどう解釈しているかを明らかにする。最後に、Ⅱ、ヘーゲル自身における真正のスケプティチスムス、ならびに哲学とスケプティチスムスの関係を明らかにして結論とする。

Ⅰ 基礎的考察

(i)シュルツェ哲学の批判

まず、シュルツェのスケプティチスムスをヘーゲルがどのようにとらえ、どのように批判しているかを検討してみたい。シュルツェはしばしばセクトゥス・エンピリクスの記述を自らの主張の根拠づけに使っているが、ヘーゲルによればシュルツェは古代スケプティチスムスを全く曲解している。この点を簡単に検討することによって、次節の古代スケプティチスムスの高貴な本質に関するヘーゲルの見解を明示するための手掛りとしたい。

ヘーゲルはシュルツェの哲学を次の(A)(B)(C)の三点においてとらえている。

(A)、シュルツェの哲学は、意識を越えては進まない哲学であり、しかもわれわれの意識の範囲内に与えられているものの存在は否認しえない確実性 (Gewißheit) をもつとする哲学である。——この側面をヘーゲルはシュルツェのスケプティチスムスの肯定的側面と呼ぶ。——シュルツェは、意識の範囲内にあるものは意識のうちに現前しており、それゆえに意識そのものと同じくその確実性をもわれわれは疑いえないといい、さらに、意識を疑わんとすることはその疑いが意識なしには起こりえないがゆえにそれ自身を無効にするという。シュルツェは、「意識のうちに意識とともに与えられているもの」(was in und mit dem Bewußtseyn gegeben ist)が「意識の事実」(eine Tatsache des Bewußtseyns)と呼ばれるところから「意識の事実」は「否認しえない現実的なもの」であると結論し、あらゆる哲学は、これに関係しなければならず、これは哲学によって説明されることができ、また理解されるものになされうる、という。(Vgl. S. 202, Kritik. Bd. I. S. 51)

(B)、このような「事実—哲学」の立場に立つシュルツェは、「哲学に属する諸判断」すなわち「意

識の事実を表現するもの、ないしは分析的思惟に基づくもの」はスケプティチズムの対象から除外し、「哲学に固有な諸判断」すなわち「意識の証によれば制約された仕方では現存する或ものの絶対的ないし超感性的、すなわち意識の領域の外に現存する諸根拠を規定する」諸判断をスケプティチズムの対象にする。要するに「理論哲学」を「懐疑の疑いの対象」(ein Object der skeptischen Zweifel)にする。——ヘーゲルはこの側面をシュルツェのスケプティチズムの否定的側面とよぶ。——シュルツェは、「理論哲学」を「われわれがふだんその現実性に関しては確信をもっているあらゆる制約されたものの最高の最も無制約的な諸原因の学」と規定したうえで、「最高の無制約的な諸原因」そのものをまた再び「われわれの意識を越えて存在する事物、いいかえれば或存在的なもの、意識に端的に対立するもの」として把握するがゆえに、「理論哲学」に対して「事物の存在の、われわれの意識の範囲外に現存する、つまりその存在に関してわれわれの意識の範囲内に与えられていない諸根拠……については全く何も知られない」と批判することになる。(Vgl. S. 201, 203~4. Kritik. Bd. 1. S. 26~27, 589~590, 593.)

(C)、シュルツェは、近代の物理学や天文学などの「諸学説」(Doktrinen)を「あらゆる理性的懐疑 (alle vernünftige Zweifelsucht) をものともしない学」として承認する。ただし、シュルツェは、ギリシアのスケプティカーにとって「すべての人間悟性に対する妥当性を自負する諸学説」が「疑いの対象」(ein Gegenstand des Zweifels)であったといい、その理由として「かれらが自分の疑いの真の根拠について無知であった」とか「当時は今日ほどあらゆる学の認識の特殊な源やその源において可能な確信の程度が探究されていなかった」とか、それらの学説が「当時はまだ証明できない意見や根拠のない仮説の総体であった」などということをあげている。(Vgl. S. 205, 209, 222. Kritik. Bd. I. S. 509)

さて、このようにシュルツェの哲学を把握するヘーゲルはそれをどのように批判しているであろうか。ヘーゲルの批判を古代スケプティチズムとの関連でとりあげるとすれば、さきの(A)(B)(C)に対応して次の(α)(β)(γ)の三点をとりあげるだけで十分であろう。それによっておのずとヘーゲルが古代スケプティチズムの高貴な本質をどこに見い出しているかは明らかとなる。

(α)、まず、(A)に関連することとしては感覚的知覚の問題をとりあげねばならない。この問題に関するシュルツェとヘーゲルの議論は、セクトゥス・エンピリクスの『ピュロン哲学概要』^②の中に言及されている「感覚の対象となるもの」(αἰσθητὰ)としての「現われるもの(現象)」(φαίνόμενα)をめぐってなされている。シュルツェの古代スケプティチズムに関する解釈は基本的に、古代スケプティチズムが攻撃したのは、(1)感覚的知覚そのものではなく、(2)独断論者たちによって感覚的知覚の背後や下部に措定された事柄のみであり、「感覚の中の対象によってこの対象の背後に存在しているはずの真の本来的な独立存在的事柄について何かが認識されうるという教説」のみである、という主張である。(Vgl. S. 205, Kritik. Bd. I. S. 597)

前者(1)の理由としてシュルツェは、『ピュロン哲学概要』第一巻第10章の解釈を通じて、古代のスケプティカーが「独立に存立している事物の現存在や一定の諸性質に関する感覚による認識や確信」(eine Erkenntniß durch die Sinne, und eine Ueberzeugung durch dieselbe vom Daseyn und gewissen Eigenschaften für sich bestehender Dinge)を認めている、と主張する。それに対してヘーゲルは、セク

トウスが問題にしているのは「行為」(*πράσσειν*) に関する事柄であって知に関する事柄ではない、と主張する。すなわち、セクトウスが問題にしているのは、シュルツェがいうような「事物やその諸性質に関する確信」ではなく、また、「知覚的表象」(*φαντασία*) に満たされた意識を客観的主張である知の位置に高めることとしての「事物やその諸性質に関する感覚による認識」を承認しているわけでもない、と批判する。(Vgl. S. 204, Kritik. Bd. I. S. 596~597, 『ピュロン哲学概要』第一巻第10~11章)

また、後者(2)の理由としてシュルツェは、哲学の歴史の中で早くから独断論者によって、感覚が現象であり、現象そのものの背後に現象とは異なる別の何かが存在するとか、感覚による認識そのものが感覚の背後に隠れている対象の学に他ならないと主張されていた、ということあげ、スケプティカーはこの独断論者によって措定された「事柄」(*Sache*) や「教説」(*Lehre*) を念頭においているのだと主張する。しかし、ヘーゲルは、「スケプティカーが蜜は苦くもあれば甘くもある、とか、苦くもなければ甘くもない、という場合、決して蜜の背後に措定された事物を念頭においているのではない」と批判する。(Vgl. S. 205, Kritik. Bd. I. S. 597~599)

かくして、ヘーゲルは、古代スケプティチスムスに関するシュルツェの解釈、「スケプティチスムスは感覚的知覚そのものを攻撃しているのではなく、感覚的知覚の背後や下部に独断論者によって措定された事柄のみを攻撃したのであるかのような解釈」は全く根拠がない、と断言する(Vgl. S. 205)。要するにヘーゲルは、古代スケプティチスムスが感覚的知覚に確実性(*Gewißheit*) を承認しているとか、感覚による認識を認めているなどという解釈を否認する。

(β)、次に(B)に関連することとしては、ヘーゲルは、シュルツェのスケプティチスムスの否定的側面、すなわち「諸々の哲学体系に対する論戦的側面(*die polemische Seite*)」はピュロンには存在しないという。この点は小論の主要テーマであるヘーゲルの真正のスケプティチスムスを理解するうえで極めて重要な指摘である。ヘーゲルは、スケプティチスムスが哲学体系の外にあってそれに敵対するものであるとは考えていない——この点は後に明らかになる。

(γ)、(C)に関連することとしては、ヘーゲルは、物理学や天文学などの諸学説について、それは応用数学であって、「それらの固有な部分には属さない純粋に数学的な部分を取り除けば、感覚的知覚を並べたて感覚的知覚と力や物質などの悟性概念とのアマルガムから構成された、一つの徹底的に客観性を主張しはするがやはり純粋に形式的な知に他ならない」(S. 205~206) という。そして、感覚的知覚の報告と独断的悟性の最高頂とからなる学説を容認するシュルツェのスケプティチスムスを「スケプティチスムスの私生児」と呼んで批判する。要するに、ヘーゲルは古代スケプティカーと同じく自然学(数学的物理学)を哲学的学とは認めないのである。

(ii)、古代スケプティチスムスの高貴な本質

以上の所論から、ヘーゲルが古代スケプティチスムスの高貴な本質をどこに見い出しているかはほぼ逆照射されてこよう。この節ではそれを積極的に呈示してみたい。

ヘーゲルによって古代のスケプティチスムスの高貴な本質は、次の(あ)(い)(う)の三点が取り出されている。

(あ)、まず、(A)－(α)に連なる点としては、スケプティチスムスが「一般的意識の独断論」を否定し、「事物や意識の事実の確実性を否定する方向」をもつものである、という点。(Vgl. S. 214, 222)

(い)、また、(B)－(β)に連なる点としては、スケプティチスムスは、哲学に含まれており、哲学と一つであり、哲学と同一であり、哲学の否定的側面である、という点。——この点の究明は小論の主要テーマをなしている。(Vgl. S. 211, 213, 222)

(う)、そして、(C)－(γ)に連なる点としては、スケプティチスムスは、「制限された認識」や「有限な知」を否定するという高貴な側面をもつものである。という点。(Vgl. S. 222)

ところで、ヘーゲルは古代のスケプティチスムスを哲学との関係で次の「三つの形態」(drei Modificationen)に分類する。すなわち、

(甲)、哲学と一つであるスケプティチスムス。この具体例としては主としてプラトンが念頭におかれている。

(乙)、哲学と切り離されてはいるが、理性や哲学を否定する方向には向かっていないスケプティチスムス。これは、セクトゥスがあげている17箇のトロポイのうち第一グループの10箇のトロポイに即して考察されており、主としてピュロンが念頭におかれている。

(丙)、哲学と切り離され、しかも理性や哲学を否定する方向に向かっているスケプティチスムス。これは、セクトゥスがあげているトロポイの第二グループである5箇のトロポイに即して考察されており、例えば、アエネシデムスやアグリッパなどが念頭におかれている。

したがって、この節では(乙)と(丙)のスケプティチスムスに取材しながらさきにあげたスケプティチスムスの三つの高貴な側面(あ)(い)(う)を具体的に呈示してみたい。(甲)のスケプティチスムスについては次節で取りあげる。

それでは、セクトゥスがあげているトロポイのうち最初の10箇のトロポイ^③についてヘーゲルはどのような解釈を展開しているかという点から検討してみたい。結論を先取りしていえば、ヘーゲルはこれらのトロポイが示すスケプティチスムスの中にさきにあげた(あ)の「最も高貴な側面」を見出し出している。すなわち、これらのトロポイは、「一般的意識が無意識的にとらわれているさまざまな有限の不確実性を根拠づけ、さらに現象や悟性が与えるものすべてが動揺するに至る精神の無関心(つまりアタラクシア——引用者)を根拠づける。有限なものすべての動揺(Wanken alles Endlichen)の中で、スケプティカーによれば、影が形に伴うがごとくにアタラクシアが理性によって獲得されて現われる」(S. 214)という。ただし、ヘーゲルのいう「一般的意識の独断論」とはここでは「与えられたもの、事実、有限なもの(この有限なものは現象とか概念とよばれる)などに固執し(festhält)、それらを確実なもの、確かなもの、永遠なものとし、それらに執着する(klebt)」立場を意味している。したがって、ヘーゲルは、これらの10箇のトロポイが示すスケプティチスムスは有限者を動揺にもたらすことによって有限者への執着や固執を断ち切るという否定性をもつものであると解釈している。それゆえに、ヘーゲルは、このスケプティチスムスは「哲学への第一段階」であるとも「哲学の始まり」であるともいうのである。

しかし、さきに述べたようにヘーゲルはこのスケプティチスムスを哲学や理性を否定する方向に

向かうものではないが哲学から切り離されたスケプティチスムスと規定している。その理由について触れておかねばならない。ヘーゲルはその理由を二つ考えている。

第一の理由は、たしかにこのスケプティチスムスは一般的意識の独断論を否定するものとして最も高貴な側面をもっているが、その仕方に関していえば、「とくに哲学的というほどではなく通俗的仕方」にすぎず、「素朴な反省」を前提しているからである。

第二に、このスケプティチスムスは、「現象や有限を援用し、その多様性や同等の妥当権や有限なものそのものの中に認識されるアンチノミーなどから、有限なものの非真理性を認識する」(S. 215) にすぎず、知 (Wissen) との関係においては「純粋な否定性」を主張したにすぎないからである。すなわち、このスケプティチスムスにおける「否定性」(Negativität) は、単に有限者相互の間でのみ生起し、絶対者との関係の中で有限者を否定するのではない、それゆえに、その否定性は肯定性と切り離された単なる否定性にすぎない——この点に関しては後にまた触れられる。ヘーゲルは、このスケプティチスムスにおける肯定的側面に関して、それはただ「性格 (Charakter) や自然必然性に対する完全な無関心などの中に」のみあると批判する。この点を考慮にいれるとき、このスケプティチスムスは哲学への第一段階にすぎず、哲学の始まりにすぎないともいえよう。

次に、ヘーゲルがセクトゥスのあげているトロポイのうちの第二グループ^②についてどのような解釈を示しているかを検討してみよう。ヘーゲルはさきの第一グループのトロポイとは「全く相異なる動向」をこれらのトロポイの中に見てとり、このスケプティチスムスは一方で独断論を否定する方向をもつが、他方で哲学や理性を否定する方向をもつ、という。

すなわち、一方では、有限なもの、対立にとらわれているもの、例えば、純粋主観、純粋客観、あるいは同一性に対立する二元性などを、絶対的なものとして定立することをその本質とする独断論を、その独断論が度外視している対立者を独断論の有限者に対立的に登場させ、それゆえにアンチノミーを確立することによって、否定する。さらに、その延長上で、物理学を否定する。この二つの点においてこのスケプティチスムスは、さきの④(5)の二つの高貴な側面をもっている。しかも、この面では「この上もなく有効な武器」を提供する。(Vgl. S. 219)

しかし、他方で、これらのトロポイは「純粋な差異」(die reine Differenz) の立場に立つがゆえに、この点で理性を否定している。すなわち、純粋な差異の立場に立つこのスケプティチスムスは、理性的なものや理性を有限なものにかえ、いわば「悪魔がキリストに要求したように石をパンに変えるのではなく、逆に理性という生命のパンを永久に石にかえる」ことなしには、これらのトロポイを適用しえない。なぜなら、ヘーゲルによれば、理性的なものとは、(1)永遠にかつ至るところで自己自身に等しく、(2)関係そのもの (die Beziehung selbst, das Verhältniß) であり、(3)いかなる対立 (Gegensatz) をもたず、さらに、(4)理性とはあらゆる不等なものを一つに定立するものであり、(5)理性にとってはいかなる他者に対する他者 (kein Anderes gegen ein Anderes) も存在しないからである。要するに、ヘーゲルにおける理性的なものとは、同一性と差異性の同一性、に他ならないからである。

以上で古代スケプティチスムスに関するヘーゲルの考察の検討を終えることにして、この節の最後に、古代スケプティチスムスに関するヘーゲルの解釈を要約しておきたい。ヘーゲルによれば、

古代スケプティチスムスは、「現われの主観性」(Subjectivität des Erscheinens)にとどまり、自分にそう見えているもののみを語り、決して客観的存在に関して意見や主張を語らない哲学である。セクトウスの表現を使えば、対象となる事物が「この私にどのように現われているか」(ἐμοὶ φαίνεται)のみを語り、その事物が「本性上いかなるものであるか」(τῇ φύσει ἔσθ' ἐστίν)に関して^⑤は判断を保留するものである。そしてヘーゲルは、このような単なる「主観性や見え」にとどまりつづけるかぎり、知に対しては無である、と批判する。

要するに、ヘーゲルは、シュルツェのスケプティチスムスに対しては古代スケプティチスムスの見失われた高貴な本質を呈示しつつも、結局それは哲学から切り離されたスケプティチスムスであると規定する。

それでは次に、哲学と一つであると規定される(甲)のスケプティチスムス——ヘーゲルはそれを *ächter Skepticismus* とよぶ——について検討したい。

(iii)、プラトン『パルメニデス』篇における真正のスケプティチスムス

ヘーゲルは、真正のスケプティチスムスをプラトンの『パルメニデス』篇の中に見い出している。その場合ヘーゲルは、『パルメニデス』篇についての分析を呈示したうえでプラトンのスケプティチスムスについての見解を明示しているわけではない。ヘーゲルは、さきに述べたように、フランクフルト時代以来の研究成果をその結論だけ一気に呈示している。

ところで、『パルメニデス』^⑥篇の主要部分をなす対話は大きく次の二つの部分に分けられる。(I) ソクラテスとゼノン、ソクラテスとパルメニデスの対話から或る部分(127.D~135.C)と、(II) ソクラテスとパルメニデス、パルメニデスとアリストテレスの対話から成る部分(135.C~166.C)である。ヘーゲルが問題にしているのは、主として、(II)のパルメニデスとアリストテレスの対話の部分(137.C~166.C)である。この部分は、プラトンによって哲学に対する「予備練習」と規定されたうえで展開されている。そして次のような二つの前提と八つの帰結を含んでいる。

(I)、もしーがあるならば、

(i)ーはXでもなければYでもない。

(ii)ーはXでもあればYでもある。

(iii)ー以外のものはXでもあればYでもある。

(iv)ー以外のものはXでもなければYでもない。

(II)、もしーがあらぬならば、

(v)ーはXでもあればYでもある。

(vi)ーはXでもなければYでもない。

(vii)ー以外のものはXでもあればYでもある。

(viii)ー以外のものはXでもなければYでもない。

ただし、X、Yに入るのは、部分と全体、始めと中間と終り、有限と無限、直と円、他者のうちにあると自分自身のうちにある、運動や変化と静止、生成と消滅、同と異、似ていると似ていない、等しいと等しくない、より大とより小、年下と同年令と年長、接触すると接触しない、増大と減少、一

と多、さらに、時間を分有する、時間のうちにある、有、名前、説明、学問的知識、言論、感覚、思いなしである。そしてこの予備練習の最終的帰結は、プラトンによれば、「……一がもしあるとしても、またあらぬとしても、一と一以外のものとは、自分自身に対する関係と相互の関係において、あらゆる仕方であらゆるものであるとともに、またあらぬのであり、そのように見えるとともに、そうは見えないことになる……」(166. C) というものである。

この対話部分に対して、ヘーゲルは次のような解釈を呈示している。(1)、プラトンの『パルメニデス』篇は、真正のスケプティチスムスの最も完成された自立的な記録であり体系である。なぜなら、(2)、それは悟性概念による知の全圏域を包括し破壊している、からである。その場合注目しなければならないのは、(3)、このプラトンのスケプティチスムスは事物を多様、部分から成る全体、生成と消滅、数多、類似などと認識しそのような客観的な主張をなす悟性のこれからの真理を「疑うこと」(ein Zweifeln)を目指すものではなく、(4)、そのような認識のあらゆる真理を「全体的に否定すること」(ein gänzlich Negieren)を目指すものである、という点である。さらに、(5)、プラトンの『パルメニデス』篇には哲学の否定的側面のみが現われており、(6)、真正のスケプティチスムスが「潜在的」(implicite)に見い出されるのではなく、「その純粋に顕在的な形態で」(in seiner reinen expliziten Gestalt)現われている。(7)、『パルメニデス』篇におけるがごとく、プラトンはさまざまな対話篇において、部分と全体という反省概念を物理学者たちに対して殲滅している。(Vgl. S. 207 ~ 208, 212)

要するに、ヘーゲルは、プラトンの『パルメニデス』篇の中に、体系的に遂行された真正のスケプティチスムスの顕在的な形態を看取り、それは〈一〉との関係の中で悟性概念によるあらゆる認識を殲滅するものである、と解釈している。ただし、『パルメニデス』篇における真正のスケプティチスムスは、哲学の否定的側面しか顕示しておらず、物的イメージに従って思惟する物理学者ないしは自然哲学者を念頭においている、という指摘も見逃してはなるまい。

ここで、プラトン解釈に関して次の二つの点が指摘されよう。第一に、プラトンにおいては、(I) (II)の前提と(i)~(viii)の帰結によって示される「考察」(σκοπεῖν)の歩みは、「知恵の探究(哲学)について」の「予備練習」(γυμνασία)であるのに対して、ヘーゲルはそれを決して予備練習とは見做していない。ヘーゲルは、それを真正のスケプティチスムスの顕在的な形態での遂行として哲学そのものに属する哲学の否定的側面であると解釈している。

第二に、プラトンは『パルメニデス』篇において「考察する」(σκοπεῖν)という言葉^⑦を筆者の調べたところでは14回使用している。周知のように、Skepticismusという言葉はσκοπεῖνに由来しているが、プラトンの『パルメニデス』篇に現われるかぎりのσκοπεῖνはいづれの場合も、一つの「前提」ないしは「そこにおかれたもの」に関して否定的な、いいかえれば背反する帰結を導き出すという仕方での考察を意味している。このような考察の仕方に、ヘーゲルは自らの真正のスケプティチスムスの典型を看取していると思われる。

(II) 結論——ヘーゲルの ächter Skepticismus ——

以上の基礎的考察を簡単に要約すれば次のようになる。(1)、シュルツェは、スケプティチスムス

を独断論との対立の中でしか提えておらず、ドグマティズムスでもなくスケプティチズムスでもない同時に両者であるような真の哲学の概念を欠いている。つまり、シュルツェは、意識の事実否認しえない確実性を承認する事実—哲学の立場に固執して、現象の背後の本来的事柄を認識せんとする理論哲学を懐疑的疑いの対象にする。この意味でシュルツェのスケプティチズムスは、疑いの教説にすぎない。(2)、セクトゥスによって伝えられている古代スケプティチズムスは、シュルツェのスケプティチズムスとは全く逆に意識の事実を知としては拒否する立場を示しており、さらに制限された認識や有限な知を否定する方向をもっている。しかしそこでは肯定的(理性的)なモメントが欠如している。(3)、プラトンのスケプティチズムスは、〈一〉に関する悟性概念によるさまざまな認識を全体的に否定することを目指しており、悟性概念による知の全圏域を包括的に破壊している。

最後に、以上の基礎的考察をふまえてヘーゲルはプラトンをも含めた古代のスケプティチズムスの研究からどのように自らの真正のスケプティチズムスを仕上げているか、さらに、哲学とスケプティチズムスの関係をどのように洞察しているか、を呈示してみたい。

ヘーゲルは、古代のスケプティチズムスに見られる本質的なこととは、あらゆる制限されたもの、意識の事実やその確実性、諸学説における諸概念、要するに有限性の土台全体を否定する働きである、そしてこの働きは、真の哲学が必然的に同時に含んでいる哲学の否定的側面であると洞察している。

ところで、この否定的側面は、ヘーゲルによれば、あらゆる真正の哲学体系のうちに「潜在的には」見い出されるという。例えば、ヘーゲルはスピノザの命題を例にとって次のように解釈している。すなわち、スピノザの『エティカ』第一部定理18の「神はあらゆるものの内在的原因であって、超越的原因ではない」という命題に関して、「原因はただ結果に対立するかぎりでのみ原因なのであるから、この命題が原因を内在的に、つまり原因を結果と一つに指定するとき、それは原因と結果の概念を否定している」という。ヘーゲルは、理性的なものの認識を表現する理性命題において、もしその内に含まれる諸概念を孤立化したうえで両者の結合の仕方に眼を向けるならば、それらが同時に廃棄されており、矛盾する仕方で合一されているのがわかるという。たしかに、神が内在的原因であるという規定のうちには、ヘーゲルに従えば、神は原因である、という命題と、神は原因ではない、という絶対者に関する二つの矛盾する命題が一つにされており、そこでは原因と結果という悟性概念が同時に否定されているといえよう。ヘーゲルによれば、一つの命題がそれだけで定立され、それに「矛盾的に」(contradictorisch) 対立する命題が同時に主張されないならば、その命題は「形式的」(formell) であり、まさにそれゆえに「偽」(falsch) であり、矛盾律は理性に対しては形式的真理でしかない、それゆえに、あらゆる理性命題は矛盾律に対する違反を含んでいるという。すなわち、理性は、矛盾の中に真理を認識するという。かくして、ヘーゲルは、セクトゥスがスケプティチズムスの原理として呈示した二つの原理のうち的一方「あらゆる言説にはそれと同等の言説が対立する」(παντι λόγῳ λόγος ἴσος ἀντίκειται^⑧) を古代スケプティチズムスの文脈から切り離して自らの真正のスケプティチズムスの原理と見做す。(Vgl. S. 208～209)

また、ヘーゲルにおける哲学とスケプティチズムスとの関係についていえば、「このスケプティチズムスは、一つの体系の特殊な事物を構成するのではなく、それ自身絶対者の認識の否定的側面で

あり、肯定的側面として直接的に理性を前提している」(S. 207)という。この記述に照応するのは、『差異』の論文や『エンチクロペディー』^⑨の中にも見られるが、その意味は、哲学とは有限者を認識するものではなくて絶対者を認識するものであって、必然的に否定的側面と肯定的側面をもつ、そしてこの哲学の否定的側面が真正のスケプティチスムスに他ならず、それは、哲学体系の「部分」(Teil)ではなく「契機」(Moment)、しかも否定的契機、弁証法的契機である、ということである。すなわち、ヘーゲルは、その思弁的弁証法の否定的契機として真正のスケプティチスムスを仕上げているのである。

それでは、この否定的側面と肯定的側面はどのように連関しているのだろうか。この論文においてヘーゲルはさきに引用したように「直接的に」(unmittelbar)としか語っていない。ヘーゲルにおける否定と肯定の連関、ひいては否定性をさらに洞察するうえで手掛りになるのは、この真正のスケプティチスムスの顕在的な形態での遂行としての『信と知』の論文(1802)の最後に現われる神の死——ヘーゲルはそこで「思弁的聖金曜日」という表現を呈示している——についての言及である。しかし、この点の究明はまた別の機会にゆずらなければならない。

註

- ①、テキストは、G. W. F. Hegel. *Gesammelte Werke*. Band. 4. Jenaer kritische Schriften. Herausgegeben von H. Buchner und O. Pöggeler. S. 197—238. なお、テキストからの引用は以下頁数のみ記す。なお、次の仏訳には益せられる点が多かった。G. W. F. Hegel. *La Relation du scepticisme avec la philosophie*. Traduction et notes par B. Fauquet.
- ②、テキストは、R. G. Bury. *Sextus Empiricus*, Vol. I, Loeb Classical Library. 訳は、『ピュロン哲学概要』(藤沢令夫訳、1965)に従う。
- ③、『ピュロン哲学概要』第一巻第14章参照。10箇のトロポイは、(1)動物相互の間の違いを論拠とするもの。(2)人間相互の間の差異を論拠とするもの。(3)感覚器官の構造の違いを論拠とするもの。(4)さまざまな状況を論拠とするもの。(5)さまざまな置かれ方と距離と場所を論拠とするもの。(6)相互混入を論拠とするもの。(7)対象となる事物の数量と構成を論拠とするもの。(8)関係性(相対性)から導き出すもの。(9)それに会える機会が頻繁であるか稀にしかないか、ということを論拠とするもの。(10)生き方の方針、習慣、法律、神話的な信仰、教義上の見解などを論拠とするもの。
- ④、『ピュロン哲学概要』第一巻第15章参照。5箇のトロポイとは、(1)異論の存在を論拠とする方式。(2)無限背進へ追いこむ方式。(3)相対性を論拠とする方式。(4)仮定による方式。(5)循環論の方式。
- ⑤、『ピュロン哲学概要』第一巻第14章、78、87、93、112、123、128、134、135、140、144、165の各節、及び第15章167節、参照。
- ⑥、テキストは、J. Burnet, *Platonis Opera*. II. 訳は『パルメニデス』(田中美知太郎訳、1975)に従う。
- ⑦、Vgl. 135. E, 136. A, 136. B, 142. C, 148. D, 154. D, 157. B, 158. C, 160. B. そして、ἐπισκοπεῖν

は、135. E , 159. B に 2 回使われている。

- ⑧、古代スケプティチスムスにおいては、エポケーからアタラクシアに至るというスケプティチスムスの目的との関連の中で語られ、その意味は、セクトゥスによれば、「何かを教義哲学的なやり方により断定的に立論するような言説で、私がしらべたかぎりのあらゆる言説に対しては、何かを教義哲学的なやり方で断定的に立論するところの別の言説、信憑性と非信憑性の程度に関して前者と同等の言説が、対立してあるように私に現われている」（第一巻27章）ということである。
- ⑨、Vgl. Differenz des Fichte'schen und Schelling'schen Systems der Philosophie, (1801) S. 16 ~ 17; Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830) §. 79~82.

参考文献

- H. Buchner, Zur Bedeutung des Skeptizismus beim jungen Hegel, (Hegel- Studien, Beiheft. 4)
- K. Düsing, Ontologie und Dialektik bei Plato und Hegel, (Hegel- Studien, Bd. 15)
- W. Bonsiepen, Der Begriff der Negativität in den Jenaer Schriften Hegels , (Hegel- Studien. Beiheft. 16)

〔哲学 博士課程 3 回生〕

Vernunft“ vorstellt, noch die Notwendigkeit des „Isolierten“ (z. B. der „Sinnlichkeit“ und des „Verstand“) ist gleichfalls nicht explikativ.

In den vorkritischen, besonders den lateinischen Schriften macht Kant gewöhnlich den Anfang von der Erklärung und Definition der Begriffe. Im Vergleich mit diesen Schriften ist uns die Art der Darstellung der „Kritik der reinen Vernunft“ sehr fremd und läßt uns irgendeine Voraussetzung der Darstellung der „Kritik der reinen Vernunft“ vermuten.

Um diese Voraussetzung der Darstellungsart klar zu machen, betrachte ich die folgenden drei Probleme. Erstens betrachte ich das Problem der Darstellungsart der „Kritik der reinen Vernunft“, die Kant selbst als „synthetische“ in der „Prolegomena“ charakterisierte (IV s. 274 f), und zweitens das des Methodenbegriffs „Analysis“, die unrichtig in den hergebrachten Interpretationen der „Kritik der reinen Vernunft“ zu wenig geschätzt worden hat. Und drittens betrachte ich das Problem der Begriffe „Form“ und „Materie“, die Kant vielleicht in der Tradition der Philosophie gewann.

Aus diesen drei Betrachtungen werden die drei Folgen klar machen lassen. Erstens die Wichtigkeit der *analytischen* Methode in der „Kritik der reinen Vernunft.“ Zweitens die Bedingtheit und *Zusammengesetztheit* der Erfahrungserkenntnisse als Voraussetzung der „Kritik der reinen Vernunft“. Drittens das *Form = Materie — Schema* als Kants Standpunkt im Anfang der „Kritik der reinen Vernunft“ und sein Verhältniss zu der *Transzendente Reflexion*. Dies ist aber nur der erste Schritt, um die Transzendente Reflexion als den höchsten Standpunkt der „Kritik der reinen Vernunft“ zu erklären.

Philosophie und Skeptizismus

— Hegels echter Skeptizismus —

von Sumiji Tsuzumi

In dieser Abhandlung versuche ich, das negative Moment in der spekulativen Dialektik bei Hegel zu verstehen. Dabei erörtere ich es durch eine Interpretation von Skeptizismus-Abhandlung Hegels im 2. Heft des 1. Bandes des Kritischen Journals: Verhältniss des Skeptizismus zur Philosophie, Darstellung seiner verschiedenen Modifikationen, und Vergleichung des neuesten mit dem alten.

In den neuesten Zeiten, sagt Hegel, wurde das edle Wesen des wahrhaften Skeptizismus „in einen allgemeinen Schlupfwinkel und Ausrede von der Unphilosophie“ verkehrt. Dagegen stellt Hegel das edle Wesen des alten und platonischen Skeptizismus. Mit kur-

zen Worten, der alte Skeptizismus hat die edelste Seite der Richtung gegen den Dogmatismus des gemeinen Bewußtseins und die edle Seite, welche sich gegen das beschränkte Erkennen, gegen das endliche Wissen wendet. Aber er für sich bleibt bei der Subjektivität des Erscheinens stehen und behauptet in Beziehung aufs Wissen eine reine Negativität. Daher ist er der von der Philosophie losgetrennte Skeptizismus. Der platonische Skeptizismus ist das vollendeste und für sich stehende Dokument und System des echten Skeptizismus, er umfaßt und zerstört nämlich das ganze Gebiet des Wissens durch Verstandesbegriffe. Dieser Skeptizismus im platonischen Parmenides „geht nicht auf ein Zweifeln an diesen Wahrheiten des Verstandes, der die Dinge als mannigfaltig, als Ganze, die aus Theilen bestehen, ein Entstehen und Vergehen, eine Vielheit, Ähnlichkeit u. s. w. erkennt, und dergleichen objective Behauptungen macht, sondern auf ein gänzlich Negiren aller Wahrheit eines solchen Erkennens.“

In Platons Parmenides sieht Hegel den echten Skeptizismus verwirklicht, der eins ist mit der wahren Philosophie. Hegel hat die Einsicht, daß echter Skeptizismus mit jeder wahren Philosophie identisch ist und nur ihre negative Seite, d. i. die negative Seite der Erkenntnis des Absoluten. Echter Skeptizismus vernichtet sich selbst und alles Endliche und Beschränkte, indem er es aufs Absolute bezieht. In diesem Sinne ist er das dialektische Moment in der spekulativen Dialektik Hegels.

Der Mut in der Philosophie

— Im Fall Nietzsche —

von Haruyuki Enso

Nietzsches Lehre von der ewigen Wiederkunft zeigt zwei Aspekte, die schwerlich vereinbar sind. Nach außen angesehen, ist sie ein befremdlichster und furchtbarster Gedanke, wonach die Ziellosigkeit des Seienden im Ganzen, das „Umsonst“ aller menschlichen Handlungen, zum äußersten Ausdruck gebraucht wird. Insofern ist sie der lähmendste Gedanke, d.h. der extremste Nihilismus. Aber andererseits befreit dieser Gedanke den menschlichen Willen von den obersten Werten, für deren Dienst der Mensch bisher gelebt hat. In diesem Fall gehört dem Gedanken der ewigen Wiederkunft die Fröhlichkeit. Zwischen den obengenannten zwei Seiten des Gedankens der ewigen Wiederkunft besteht es eine tiefe Kluft. Was den ersten Aspekt zu den letzteren